

博士論文の要旨

氏 名 内田 修一

論文題目 マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究

生活環境の過酷な北部から移住してきたソンガイたちは、植民地期以降、マリの首都バマコで彼らのホッレイ・カルトの実践を維持してきた。このことは、こうした実践の維持には困難（多くの参加者を集める集合的実践の停滞等）が伴っているだけに、ソンガイ移民たちにとっての彼らの精霊憑依の実践の重要性を示唆している。異郷の大都市で実践される彼らの精霊憑依は先行研究で記述されてきたものとは異なり、ホッレイ・カルトの多様性、他の精霊憑依カルトとの境界の曖昧さ、及び多数の活動組織者の並存と様々な場所での活動を特徴的傾向として示しており、とりわけ集合的実践の減少が問題視されていた。この状況は、様々な出身地から多様な精霊憑依の経験を持つ霊媒たちが合流し、他民族が多数派を占める環境で活動していることと関連していると考えられる。こうした実態に鑑みて本研究は、様々なアクター（個人、精霊、集合体）が織り成す関係性を中心に精霊憑依の実践を記述し、この実践の参加者たちにとっての意義（意味を成し、重要性を持つこと）について考察することを目的に定めた。

上記3つの特徴的傾向は、実践者間での知識・流儀の食い違い等の問題を孕んでいる一方で、彼ら各人の経験の多様性と自律性の発現と解しうる側面を含んでいるため、両義的と言える。このことに加えて、先行研究の批判的検討を通して得られた知見を考え合せて、本研究はエティエンヌ・バリバルの超個性性の概念に関する議論を参照し、諸アクターを自律性と個性を備えた実践主体である個体として把握する観点を導入した。この観点からは、精霊憑依の実践は様々な個体の相互行為と（再）形成の過程として捉えられる。

ソンガイの精霊憑依の実践では、人と精霊のみならず、実践者同士の関係も重要であり、そこにはコスモロジーと社会生活の次元が関わっていると考えられる。精霊（ホッレイ）は、異界でもある人里の外部に住む、ソンガイからみて人間に対して他者性が強調された、人智を超えた力を持つ存在であるが、同種の社会性を人間と共有しており、このことは社会関係とそれに付随する価値・規範（道徳性）が両者の間で共通している点に端的に表れている。この意味で、精霊の世界と人の世界（ソンガイ社会）は並行的な関係にある。そして、実践者たちは異なる精霊憑依カルトを区別している一方で、バマコで精霊憑依に関して個人や民族の間に観察される様々な差異は本質的なものではなく、流儀の違いにすぎないと認識していること、彼らの世界観へのイスラームの影響等を考え合わせると、精霊憑依の実践が彼らにとって意味を成し、重要性を持つのは、ホッレイと同一視されたジンやアッラー等がそこに位置づけられた、2つの世界の並行性を特徴とする、地域や民族を超えたコスモロジカルな地平においてであると推測される。

かくして本研究は上記目的のために、この実践を実践主体としての様々な個体の相互行為と（再）形成の過程として捉える視座に立ち、精霊の世界と人の世界の並行性を手がかりとして、都市環境にある実践者たちにとってこの実践がいかに意味を成し、重要性を持

つのかという問いを提起した。

以上の議論に基づいて本論では、調査地バマコ市、ソンガイ、ホッレイ・カルト等について概要を略述し、当地におけるホッレイ・カルトの実践の全体像を俯瞰した後に、人と精霊の二者関係、二者を越えた諸アクターの繋がり、及び精霊憑依の実践を通して（再）形成される集合体に関する事例をとりあげて記述と考察を展開した。また、農村（ホンボリ郡）の事例に関するデータを活用して、バマコ市で収集したデータを補足した。

検討した事例からは、実践においては2つの世界に共通した社会関係が集合的個体の（再）形成や新しい紐帯の創出において一定の役割を果たしている一方で、精霊が特定の霊媒と結びついて認識され、霊媒同士あるいは霊媒と他の実践者の間で、精霊憑依に関する関係と社会生活における関係が輻輳する傾向があること、並びにこうした輻輳は精霊憑依の文脈と社会生活の文脈を錯綜させる傾向があることが明らかになった。精霊憑依の領域と社会生活の領域の境界を曖昧にするこれら傾向は、実践者たちが精霊を含む他者たちとの関係性のために、状況に応じて、2つの文脈を横断して精霊憑依を有意に実践する素地を形成しており、この素地ゆえに、2つの領域は積極的に結びつけられ、混交されていた。最も活発な実践者たちの特定の地区への集住の例等を考え合わせると、こうした関係の（再）形成には、実践者たちの多くが日常生活を共有しておらず、また実践の枠組・基盤が日常の生活領域と一致していない都市では、農村よりも大きな意味と重要性があると推測される。

他方で、精霊憑依は「場所が変わればやり方も変わる」という実践者たちの認識、彼らの一部のマンデ系民族の精霊憑依カルトの実践への参加、異なる精霊憑依カルトの間での精霊の同一視、インドや中国等遠方に由来する新しいエキゾチックな精霊に関する語り、都市と農村の違いを超えた一般性を持つ精霊と人の間の庇護-従属の関係等からは、普遍志向的と呼びうる性質を備えた、そこにおいてこの実践が展開するコスモロジカルな地平が浮かびあがった。

以上のような議論から、本論が冒頭で提起した問いに対して導き出した答え（結論）は、精霊の世界と人の世界の並行的な在り方は、実践者各自の経験、ローカリティや民族の違いを超えた、非-人間である精霊を含む諸アクターの相互行為が可能となる地平を開いているのみならず、実践の次元で精霊と霊媒が結びつく傾向と連動して、精霊憑依の領域と社会生活の領域の接合、混交、相互作用を促進し、かつこれらのアクターのエートスと循環的に再構成し合うことにより、これらの領域にまたがった個的及び集合的な実践主体の相互行為と、状況に応じた暫定的な（再）形成を支えている、というものである。

本研究の意義は主に、サヘル地域に関する精霊憑依研究においてほとんど詳細な記述と考察の対象となつてこなかった大都市における実践を、長期の集中的な調査に基づき、研究対象の特徴との関連で構築された独自の視座から記述・考察したことによる民族誌的な貢献にある。一見したところ把握し難い調査地における精霊憑依の実践をその特徴に即して記述することのみならず、実践において精霊が特定の霊媒が結びつく仕組み、及びこうした結合が精霊の世界と人の世界の並行的な在り方と連動して、精霊憑依の領域と社会生活の領域が繋ぎ合わされたり、混交したりする仕組みの解明は、とりわけ様々な実践主体を個体として捉え、これら個体の相互行為と（再）形成の局面に注目することで可能となった。

また本研究は、精霊憑依が都市化を含む同時代の文脈において「セラピー化」しつつあるという既存の仮説をとりあげ、本論で得られたデータ・知見と突き合わせることで、精霊憑依の動態に関する学術的議論に参加し、この仮説が他の先行研究の知見を取り入れて示している、都市では精霊憑依は苦悩する周縁的な人々に対する心理-社会的次元でのセラピー的な機能を担うという見解に対して、全く異なる都市における精霊憑依の実践の像を提示した。すなわち、個人、地域、及び民族的差異を超えた普遍志向的な側面を顕著に示す一方で、精霊憑依の領域と社会生活の領域を結びつけたり、重ね合わせたりして、アクターたちの関係を状況に応じて形成していく側面が重要な意味を持っているものとしての、都市における精霊憑依の実践の姿である。